

# 大学生における小児期逆境体験と抑うつ傾向の関連性

— 虐待加害者への許しがもたらす心理的緩衝効果の検討 —

○桑原 花実<sup>1</sup> 武田 知也<sup>1</sup>

(<sup>1</sup>人間環境大学総合心理学部総合心理学科)

## 目的

児童虐待(≡小児期逆境体験(Adverse Childhood Experiences: ACEs))は成人後の精神的健康に深刻な影響を及ぼすといわれている(中井・福井, 2024; 廣澤, 2020; ジョイ.D.オソフスキー他, 2019; 判田他, 2003)。例えば、小児期に ACEs を体験した人は、成人後に抑うつなどの精神症状を抱えやすい傾向がある(中井・福井, 2024)。一方で、ACEs を体験した全ての人が抑うつを発症するわけではない。ACEs から抑うつへの発症へのルートを緩衝する一つの要因として虐待者への許しが考えられる。許しには怒りや恨みを低減し、抑うつ症状を緩和する効果があるとされている(Salamon, 2024)。

本研究では、以下の2点について検討する。まず、小児期逆境体験が多いことによって、現在の抑うつ重症度が高いことを明らかにすることである。これは、中井・福井(2024)による研究成果を参考にしつつ、抑うつ発症リスクと ACEs との関連についての追試を行うことを目指している。次に、ACEs を経験していても、すべての人が必ずしも抑うつ重症度が高くなるわけではないことから、本研究では、抑うつ傾向が高くなるかどうかに影響を及ぼす心理社会的要因として許しに注目し、ACEs から抑うつ重症度への許しの調整効果を明らかにすることである。

## 方法

対象は A 大学の大学1年生から大学4年生の計106名(平均年齢19.55歳±1.16)を対象とした。評価尺度は3つの尺度を使用した。1つめは三谷(2022)が使用した小児期逆境体験を測る ACEs 尺度である。身体的虐待・心理的虐待・性的虐待・身体的ネグレクト・心理的ネグレクト・親との別離・近親者間暴力・依存症の家族・精神疾患の家族・服役する家族の全10項目であった。2つめは Muramatsu et al.(2007)が作成した抑うつ程度を測る PHQ-9(Patient Health Questionnaire=9)である。カットオフ得点は27点中10点とし、10点以上

を抑うつ状態である、9点以下を抑うつ状態でないとした。3つ目は許しの程度を測る尺度である。ACEs 尺度で1項目でも「はい」と回答したものを対象に質問(「虐待を行った人物を許せていますか」)を行い、回答を1(許せていない)~10(許せている)の10件法で求めた。

統計解析は小児期逆境体験(ACEs 得点)、抑うつ症状(PHQ-9 得点)と許しの関連性を検討するため、R 及び RStudio を使用し、順位双列分析を行った。

倫理的配慮として、自由意思による参加である旨と、回答中には随時参加同意の撤回が可能であること、集計したデータは学術的使用の目的であること、参加に際して生じる可能性のある負担並びに予測されるリスクおよび利益、個人情報の取り扱いに関して、得られたデータは集団で扱うため、個人が特定されることがないということについて説明を行った。

## 結果と考察

### 1. ACEs と抑うつとの関連

身体的虐待、心理的虐待、心理的ネグレクト、依存症の家族、精神疾患の家族、ACEs 尺度合計得点と PHQ-9 合計の間に有意な正の相関がみられた( $p<.05$ )。ACEs 項目のうちいくつかは、成人期の抑うつ症状の発現と密接に関連しており、ACEs が精神的健康に及ぼす長期的影響の重要性を改めて支持する知見であると考えられる。

### 2. ACEs と許しの関連

心理的虐待、心理的ネグレクト、親との別離、ACEs 合計得点と許せているかの間に負の相関がみられた( $p<.05$ )。これらの結果は、ACEs 経験がある者は現在も虐待加害者を許すことが難しいとことを示している。

### 3. 今後の展望

本研究は大学生を対象としており、結果の一般化が困難である。そこでより多様な年齢層を含めた研究の実施、また、許しを測定するための多次元的心理尺度の導入が挙げられる。